

社会科におけるフィールド・ワーク

—— 中1、地理・歴史を中心に ——

原 幸宏 丸山 豊

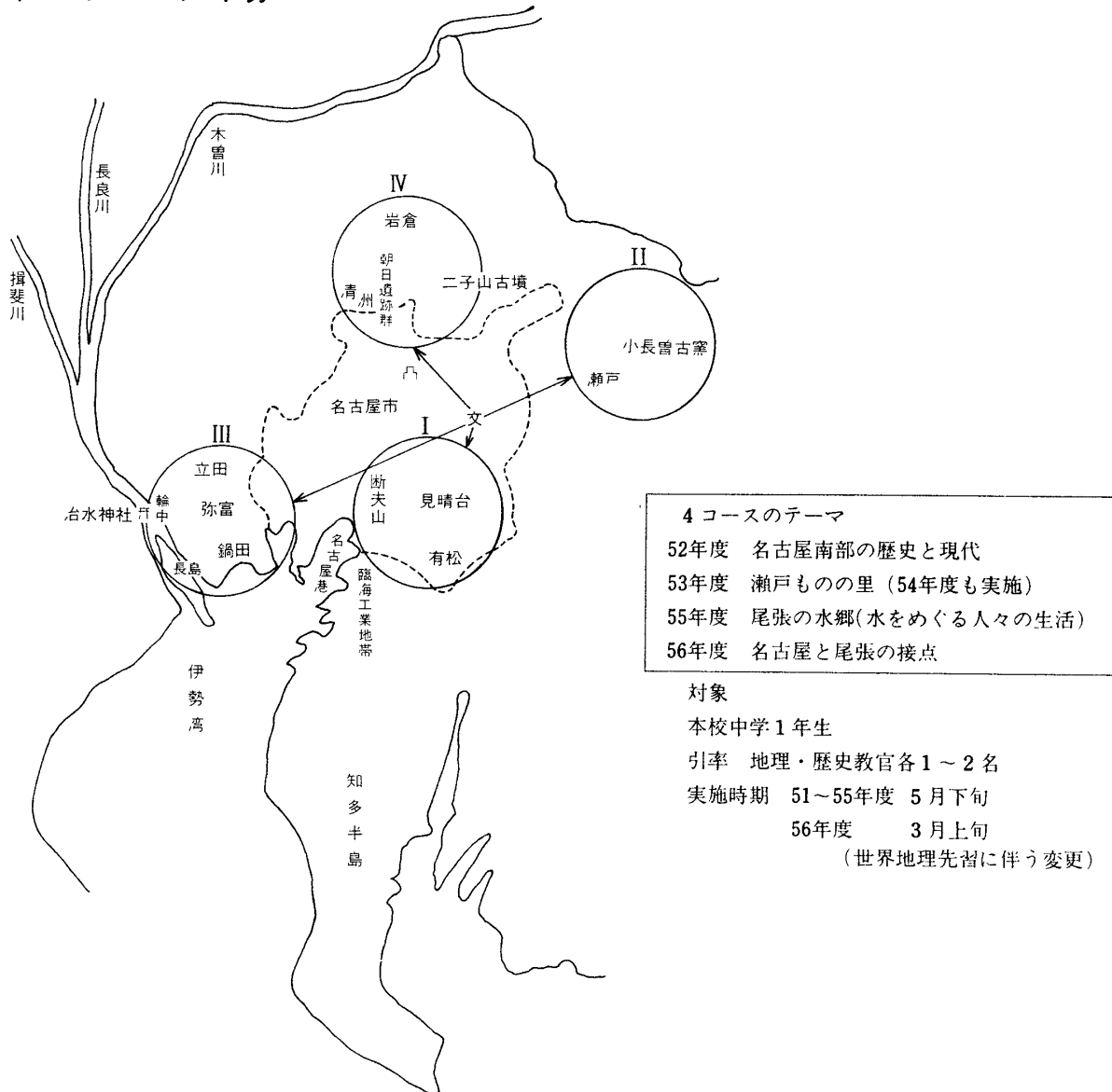
1. はじめに

本校（中学）は、公立中と違い学区を中心とした地域が明確でない。生徒は名古屋市内各地に在住し、彼らの地域性は、名古屋周辺を含む尾張部に広がる。したがって、地域教材を尾張に拡大して求め、フィールド・ワーク（野外学習）もバス利用の一日行程で実施

してから5年を経過した。幸い本中学は、一学年二クラス、生徒数90名という小規模校であり、各コースの設定も小人数を生かしたフィールド・ワークを展開してきた。

本論では、過去五回、4コースの視点を提示し、フィールド・ワークの位置付け、今後の在り方を探ってみたい。

2. フィールド・ワークの区分



3. 各コースの概略

(1) 名古屋南部の歴史と現代 (1977年度)

本校 — (八事) — (相生山) — (天白川後背湿地)

八事遺跡地 相生山 沖積テララ
開発と自然

有松絞 — 見晴台 — 名古屋九号地 — (南陽通り)

田山道集活 市民の手による歴史発掘 エネルギー基地 コンヒナート
伝説的業 発掘〜中世の道跡 臨海1号地帯

(内田橋・熱田神宮) 断夫山古墳・貯木場

七里の渡し 断断橋

(大須) — 本校

〈学習の視点〉

フィールド・ワークの大きなねらいとして、現場の話を直接聞く機会を持つ意義を第一にあげたい。名古屋南部コースでは、見晴台遺跡と有松絞の二カ所でその機会を設定した。見晴台遺跡については、昭和52(1977)年当時は、資料館が構想の段階であり、小中高大、現場の教師たちによる集団の発掘が続けられており、あたかも「野尻湖の発掘」を思わせるような熱気であった。見晴台の発掘の歩みについては、担当者の桜井氏に來校いただき、一時間の特別講座を設けた。スライド、新聞、文集等の現物を見ながら、見晴台の役割りについて学んだ。

事前学習で一時間、フィールド当日は、学芸員を中心に「考古学」の実際や、遺跡地に残る大戦中の高射砲を囲み、「現代考古学」の重要性などを語ってもらった。そこには、粘り強く掘り続け、市民の歴史教育の場として必死に発掘を支えてきた人の言葉の重みに、教科書や、我々教師の説明からでは学べないものがあった。

有松絞と旧街道の町並みは、クラス別に2グループに分け、有松絞の歴史やその手作業の実際について、まず、映画を当地で見、担当者の説明をうけてから作業行程を見学した。

断夫山古墳、エネルギー基地は、本校の担当教科で説明をおこなったが、やはり、実際に仕事に携わっている人から話を聞いたり、直接現場に触れ学習する意義は、中高の社会科の中で特に欠落した部分といえる。幸い本校は、2クラス90人余という小規模校を生かしコースも他校では設定できない内容を考えることができたと思う。

(2) 瀬戸ものの里コース (1978・79年度)

このコースについては、原幸宏『野外学習に伴う作業学習』(本校紀要 vol 24・1979年)で詳しくふれているので、簡潔に整理しておきたい。

本校 — 長久手・岩作 — 瀬戸民俗資料館
陶磁器センター

陶土採掘現場 — 雲興寺 — 小長曾古窯 — 県窯業
(昼食)

高等職業訓練校 — 本校

〈学習の視点〉

本コースは「瀬戸物」の歴史と現代の問題点を探るのがねらいである。まず、瀬戸の窯業の大まかな歴史を、陶磁器センターで、近世以降の瀬戸ものの様々な歩み、道具、窯の移りかわり、庶民のアイデア等を、民俗資料館で、共に現物に接しながら学ぶ、特に民俗資料館では、館長や学芸員の説明をうけると同時に館製作のV.T.Rを見るという多彩な学習内容である。次の陶土採掘現場は、グランド・キャニオンを想わせるほどの雄大きさに感嘆し、また、ひっきりなしに往復するダンプカーの流れに陶磁器産業の現代の重みを知る。その後、雲興寺で昼食をとり、奥の小長曾古窯にむかう。南側の適度な斜面の林の中にある古窯は、室町以降のものといっても、マキのくべ方、火の回り方、製品のおき方、ケムリの出方など、生徒たちのイメージを大きくふくらましてくれる。最後に、高等職業訓練校を訪れ様々な年令の人たちが職を身につけるため陶磁器づくりと真剣にとり組む姿に、職業、自分の生き方を考えさせる機会にもなる。

本コースの問題点は、一つに町工場見学が組み入れられなかったことである。理由は、90人規模の見学者を受け入れられる工場が少なかったことと、磁器製作での「ほこり」の混入等である。

(3) 尾張の水郷 (1980年度)

本校 — 名古屋南部 (国道23号線) — 鍋田干拓
名古屋南部の近世の新田
日丸川 臨海1号地帯

伊勢湾台風殉難の塔 — 愛信農場 — 鍋田川水門

(長島町) — 千本松原 — 弥富町の金魚 — (立田

村) — (津島) — 本校

1980(昭和55)年度は「水」をテーマにとりあげ、地盤沈下、治水、水を生かした産業(養殖・れんこん)新田開発、伊勢湾台風と、主にゼロメートル地帯を中心に水と人々の生活との関連を探るコースを設定した。—歴史学習の課題—

①名古屋南部、海部郡の新田開発

- ②伊勢湾台風
- ③鍋田干拓の歴史
- ④長島の一向一揆
- ⑤輪中と宝暦治水

—地理学習の課題—

- ①水と農業
- ②水を生かした生活
- ③南部臨海工業地帯
- ④ゼロメートル地帯
- ⑤地形図の読み方

—総合学習の課題—

- ①尾張の地盤
- ②地盤沈下と公害

歴史、地理、それに総合学習としての課題をどう具体化して学習させていったか、そのプロセスを「発問」の流れとしてまとめておく。

名古屋南部の新田開発はいつ、どのように行われたのだろうか。

- イ. 25000分の1の地図で「～新田」をできるだけ多くさがしてみよう
- ロ. 作業図で17世紀～19世紀の新田を色分けして時代区分をしてみよう
- ハ. 新田の名称は、どのようにしてつけられるのだろうか
茶屋新田、神戸新田、政成新田など
- ニ. 新田を開発すると誰が利益をえるのだろうか
- ホ. 近世にできた新田は、現在どのような姿になっているのだろうか

ゼロメートル地帯は、どんな問題をかかえているのだろうか

- イ. 25000分の1の地図に0メートル地帯を赤線に記入しよう
- ロ. 昭和36～53年までに地盤沈下した量はどれだけか調べよう
- ハ. 名四国道は、どんな目的でつくられたのか
- ニ. 日光川にはなせ水門があるのか
- ホ. なぜ、尾張西南部は、地盤沈下するのか
- ヘ. いつごろから、沈下が激しくなったのだろうか
- ト. 沈下は人々の生活にどのような影響を与えるのか

伊勢湾台風について調べてみよう

- イ. いつ、どんな進路で、
- ロ. 君たちの、おとうさん、おかあさんは?
住んでいたところ、何才か? 何をしていたか、
- ハ. その時の気持ちを詳しく聞いてメモしよう
- ニ. 調べてみよう
浸水地域とゼロメートル地帯、死傷者、倒壊家屋数、堤防がなぜ崩れたのか…

鍋田干拓(愛信農場)で直接質問しよう

- イ. 鍋田の歴史
- ロ. 伊勢湾台風で鍋田は?
- ハ. 愛信農場の歴史
- ニ. これから鍋田は?

輪中と宝暦治水

- イ. 輪中とは何か、どのへんにあるのか
- ロ. 輪中の水害回数を調べてみよう
- ハ. 尾張藩に水害がほとんどないのは、なぜか
- ニ. お田堤の歴史について
- ホ. 輪中の人々の生活の知恵にどんなものがあるのか
- ト. 最近の輪中は、どのように変化しているか
- チ. 宝暦治水について調べよう
 - 幕府の三川分流政策とは
 - なぜ薩摩藩に命じたか
 - 薩摩藩はその費用をどう調達したか
 - 地元の百姓たちの気持ち
 - 堤防の築き方
- リ. 岸武雄著『千本松原』を読んでみよう

このような形で、事前学習で生徒たちの問題意識を整理して、フィールド・ワークに臨む。本コースは、「水」をテーマとして、実に多くの学ぶべき要素の多いコースである。

1981年度の、名古屋北西、尾張コースについては、次の章(原幸宏)で触れるとして、今後のフィールド・ワークについての問題点をまとめておきたい。

- ①中学の何年生に各々のコースがふさわしいのか
- ②国語、理科を含めたフィールド・ワークになりえないかどうか
- ③事前指導と事後指導のあり方
- ④前述の4コース以外にどんなコースが考えられるか

⑤生徒自身、フィールド・ワークをどう受けとめているか

今後、予定されるコースとしては
 ○ 織維の町、一宮、尾西コース
 ○ 近世の在郷町、足助、稲武の果した役割を探るコース
 ○ 愛知用水と知多半島をめぐるコース
 など、今後検討していきたい。(文責 丸山 豊)

4. 地歴並行学習における身近な地域

地理的分野における「身近な地域」の学習のねらいには、「地域を」理解させる目的概念と、「地域で」理解させる方法概念の二面性がある。改訂された現行の学習指導要領では、この目的概念的ねらいの比重が従前より大きくなったといえる。それは、「身近な地域」を日本の諸地域の一部として取扱い、世界や日本の他地域との関連について配慮するようになったからである。「身近な地域」の学習内容は、野外学習と大縮尺の地図学習を基盤とする地理的理解が主体である。なかでも野外学習や身近な諸事象を対象とする学習は、空間認識を深める唯一の直接経験の学習の場であることから、地理的分野では学習上不可欠といえる。ところで、地理的分野の内容構成は学習指導要領の改訂で再構成されたが、その特徴的なことは「世界地理」先習の理念と、地歴並行学習の観点に基いていることである。こうしたことから、「身近な地域」と歴史的分野における郷土学習との関連は従前よりも強く配慮されうるし、地歴総合学習の同時展開が効果的意義をもつことになる。

歴史的分野における学習指導要領「目標」(3)に、「現在に伝わる文化遺産をその時代や地域との関連において理解させ、それを愛護し尊重する態度を育てる。」と“地域”が新たに付加されている。文化遺産を地域の特性のなかにおいて考察させるにとどまらず、身近な地域には、いわば郷土をも含み、具体的に史料を通して学ばせようとする配慮の重視である。また、歴史的分野の「内容の取扱い」の(3)では、「特に内容の(5)、(6)、(7)及び(8)の取扱いにおいては、地理的分野との関連を図り、かつ民俗学の成果を活用するなどして、郷土の生活文化に触れさせることが望ましい。」と示されている。このように、地理的分野の「身近な地域」と、歴史的分野の郷土学習の関連付けが強調されている。

本校においては、既に丸山豊が述べたように、過去5か年間継続して地歴並行型の野外学習を通して、分野間の関連を模索してきている。そこで、5年目に当たる昭和56年度の野外学習実施内容を示し、生徒がどのように受けとめているかを考察してみたい。

社会科野外学習実施要項

日 時 昭和57年3月10日 (水)
 午前8時30分～午後4時10分
 学 年 中学校 第1学年(90名)
 引率及び指導者：担任2名、地理的分野担当教諭2名、
 歴史的分野担当教諭2名、養護教諭1名、
 計7名

目 的 名古屋市北郊をフィールドとして、史跡・資料館ならびに伝統産業・近代工場の見学を通して郷土の歴史・地域性を考察させ、併せて車窓景観を通して地理的・歴史の見方や考え方の涵養を図る。

内 容
 〈地理的分野〉 近代的な機械生産工程と伝統的な手作業工程とを実地に見学し、両者の生産性の対比と共存化、伝統産業の存続理由や保護育成対策まで発展的に考察を加える。
 〈歴史的分野〉 縄文・弥生時代から古墳時代にいたるこの地域の遺跡を実地に見学し、東海地方での早期文化発祥の条件を考えさせ、資料館の見学を通じて今までの歴史の勉強の総まとめとする。

行 程
 集合(本校テニスコート)―出発―麒麟ビール
 8:30 8:40 9:30
 名占屋工場―(岩倉市児童館にて昼食)―
 ~11:00 11:30~12:10
 松浦家鯉のぼり生産工房―清洲貝殻山貝塚資料館
 12:10~13:00 13:30~14:30
 ―二子山古墳―学校帰着
 15:00~15:30 16:10

携行品：5万分の1地形図
 (図幅「名古屋北部」)
 筆記用具
 ただし、カメラは自由

以上に示す野外学習実施に当たっての事前学習は、クラス当たり3時間を充て、5万分の1地形図を資料として、巡検コース、下車見学地での学習内容とその周辺部の地域性・歴史的背景を中心に読図と着色作業による土地利用状況を把握させた。一方、事後には学習内容の整理・まとめを行い、感想文(反省)を書かせた。

提出された感想文を基礎資料として、野外学習に対する生徒の受けとめ・反応を集約すれば次のようである。

表1 野外学習全体を通して見た反応

学習時間=6時間	
反応事項	百分比
教室では学べない多くのことを学び、考えさせられたり、興味がわいた	50.0
見学するところが多く、疲れた	10.3
よい思い出になった	10.3
集団学習で楽しかった	8.8
下車見学地以外、車中で説明があり、幅広く地域の勉強ができた	5.9
車中では遠足の時ぐらい楽しめたかった	4.4
メモをたくさんとりたかった	2.9
天気がよく、写真がたくさんとれてよかった	2.9
身近な地域に見学する場所が多いことを知った	1.5
パンフレットをもらったので、後でまとめるのに都合がよかった	1.5
野外学習で学んだことを教室での勉強に役立てたい	1.5

記載事項、延68項目を100%とする

野外学習全体を通しての反応を示す表1によれば、野外学習に対する生徒の期待感は強く、学習効果の大きいことがわかる。個人差があるにせよ、教師の意図する地理的・歴史的認識の枠を越えた生徒自らによる発見や着眼が認められる。野外学習そのものについて記した内容を例示してみよう。

P₁:「今回の野外学習で感じたのですが、学校では表面だけの事を習っています。…中身というか、本当の姿というものは、ほとんど知りません。また、知る機会もまったくと言っていいほどないのです。そんな事を解決するための方法として本当によいことだと思えます。…また、このような機会をつくっていただきたいと思えます。」

P₂:「野外学習で思ったことは、毎日がこんな勉強だったら、きっと楽しく勉強できて覚えやすいと思えました。そのはんめん、費用や時間やつかれがあるので野外学習はめったにできない、いい体験になったと思えました。私は、名古屋に越えてきて1年にもなるのに、あまり名古屋の地理は知りません。けれど野外学習で名古屋の地理も少しわかりました。」

さて、感想文の内容を見ると、その多くが下車見学地に視点を置いて記されているので、主として地理的内容の見学地2か所(表2・表3)、歴史的内容の見学地2か所(表4・表5)に分類し、次のように整理される。

表2 キリンビール名古屋工場

見学時間=90分	
反応事項	百分比
工場の敷地(ナゴヤ球場の10倍)が広い	13.3
大量生産(日産230万本)におどろく	12.7
生産技術の発達、機械化がすすんでいる	10.7
見学前に映画やくわしい説明がありよくわかる	10.7
労働条件に関心をいさぐ、(単純労働、女性が目立つ、従業員が900人と多い)	10.0
製造工程が長く、検査がきびしい、(清潔)	8.9
工場内で独特のにおいが気になる	7.4
原料から製品になるまでの道すじに興味をもつ	6.8
海外からの輸入原料が多いことにおどろく	5.2
麦の種類が多いことにおどろく	4.1
異なる製品が生産のうえで関連している	3.7
ビンの製造など、他の工場と関係が深い	2.6
工場見学の時、説明が早くメモがとりにくい	0.7
20年の歴史があるのに工場がきれい	0.7
廃液の処理がしっかりしていて安心	0.7
もう一度工場見学したい	0.7
農作物と工業の関係がよくわかった	0.4
日本の工業の将来がたのしみに思う	0.4
原料の輸入が途絶えた場合、どうなるのか疑問	0.4
商標の由来がおもしろい	0.4

記載事項、延271項目を100%とする

表3 松浦家鯉のほり生産工房 見学時間=50分

反応事項	百分比
伝統工芸に感動、大切さを思う(継承・存続)	16.3
彩色に心を引かれる(美しさ・原料との関係)	15.7
手先の技術に感心する(技画法)	15.4
手間のかかる作業である(苦労・几帳面)	9.8
作業工程で水に浸す五条川がきたない	7.8
自分でも製作してみたい	5.7
就労時刻の早さにおどろく(早朝・労働時間)	4.9
説明がよく解らない(ろうけつ染など)	4.0
工房が小規模で、機械化していない	3.3
工房が古めかしく、働いている人が昔風	2.4
製品に対する需要減が問題である	2.4
テレビで放映された工房が身近に所在する	1.6
人手不足と土地の狭さが問題である	1.6
見学時間が長く、勉強になった	1.6
製品の素材に興味をいさぐ	1.6
鯉のほり以外に製品の種類が意外と多い	1.6
写真をたくさんとりたかった	1.6
五条川を見て、川を汚してはいけないと思う	1.6
興味がない(大規模工場や資料館と比べて)	1.6

記載事項、延123項目を100%とする

表2・3の地理的な学習分野についてみると、直接見聞した諸事象に関する記述が多いのは当然としても、その受けとめには感動・驚きなどの感性を伴った反応がみられ、観念的理解というより、空間認識が深く、社会性・人間性・歴史的な伝統・生産性・文化など、反応の領域は多岐にわたって広く、人間の生きざま(労働・技術)・文化・自然を自己との直接的な関わりのなかで意欲的にとらえているのが特徴である。その一部を原文で示してみよう。

P₃:「ビール工場を見学したとき、オートメーション的に作られていく製品にぼくはびっくりしました。また、女性も多かったことに気づきました。やはり機械的なので大きな力はいらさないからでしょう。あらためて人間の技術の発達におどろきました。……このぼりづくりを見たとき、こんなにうまくできる人に感心しました。近くの五条川を利用し、美しい色で美しい絵をつくるこんな技術、これは機械ではできない物です。機械自身でできないものを人間自身の技術でできるのです。しかし、これは何年かの努力の積みかさねであって、これも機械とちがう所です。こんなきれいな物を自分もつくってみたいと思いました。』

表4 清洲貝殻山貝塚資料館 見学時間=1時間

反 応 事 項	百分比
館内の展示がよい (興味・関心を引く)	26.7
復元住居に感嘆 (生活の様子も復元してあるととってもよい)	19.7
人骨におどろく	9.2
発掘すればまだ出土するのではないか	7.9
館外で土器の破片を発見したよろこび	5.8
遺跡保存の大切さ	3.9
再訪したい (見学時間不足)	3.9
発掘してみたい	3.9
上手に発掘したものだ (出土品をみて)	2.6
初めての資料館見学 (この種の資料館)	2.6
復元住居の中に入りたかった (館内見学で時間不足)	2.6
住宅化が文化財の破壊につながるのか	2.6
この地になぜ貝塚や遺跡が多いのか疑問	2.6
質問に対し、説明がいてない (館員)	1.3
遺跡、遺物などから当時の生活のようすが想像できる	1.3
出土品の価値がわからない	1.3
見学時間が長すぎる	1.3
館内で写真をとりたい	1.3

記載事項、延76項目を100%とする

表5 二子山古墳

見学時間=30分

反 応 事 項	百分比
規模が大きい (予想以上・意外に)	21.1
前方後円墳がわかる (前方と後円の区別)	18.5
古墳の意味がはっきりしない	11.3
どうして古墳を発見するか(手がかり)が疑問	8.5
興味がない (外周を歩いて観察した結果)	7.0
熱田にある断夫山古墳と比較してみたい	4.2
資料館が作ってあるとよい (理解するため)	4.2
見学時間が短い	4.2
発掘した埴輪などをみたい	2.8
古墳なのか疑問に思う	2.8
古墳が現存することにおどろく	2.8
古墳を大切にしなければいけない	2.8
古墳を作った当時の人々は大変であったと思う	1.4
既習した内容と現地での古墳と結びつく	1.4
発掘してみたい (興味がわく)	1.4
墳丘の中に入ってみたい	1.4
規模が小さい (断夫山古墳と比べて)	1.4
見学しやすいように整備してほしい	1.4
景観上殺風景	1.4

記載事項、延71項目を100%とする

一方、歴史的な学習分野に関する反応(表4・5)をみると、遺跡や出土品を直接見たり説明を聞くことによって感性を伴った反応がみられるのは地理的分野と同様である。ことに、資料館での展示品を通して興味・関心度は増幅し、発掘に携わってみたい意欲にかられ、土器の破片を発見した時のよろこびや感動は大きい。二子山古墳では資料館などがなく、出土品を直接見ることができなかったため、表4とは異った反応がみられる。いずれにしても昔の人々の生活の様子を知りたい意欲は、以下に示す原文に表われているといえよう。

P₄:「貝殻山貝塚資料館では、いろいろめずらしいものがてんじされてあり、うまくはくつしてあるのにおどろきました。……ぼくは、昔の人の生活のあとなどをこの眼で見て、新たに興味かできました。二子山古墳もじかに見て大きいなあと思いました。ほんとうに前方後円墳になっていたの、うまくつくったなあと思いました。そして、これより大きいもの(断夫山古墳のこと)もあるというので、それを見たいと思います。』

5. まとめ

地歴並行型を基盤とする野外学習は、授業時間にして6時間相当を年間指導計画に位置づけ、継続的な実践の積み重ねによって、定着したといえる。実践計画

を立案する段階では、社会科のすべての教師が参画して地域の選定、学習の目標設定・内容、それに方法について検討し、その過程で予備調査を行い、学習内容に関する資(史)料を収集する。事前学習で用いる生徒用資料を作成し、事後指導同様にその活用を重視する。地歴の各分野にそれぞれ指導担当者を2名充てるのは、生徒45名を単位とする2グループ(クラス)を対象に、地理および歴史的視点から指導する体制を基本とするからである。このように指導者側の体制は確立しているものの、分野間の相互関連がはたして有機的に結合しているかの疑問が残る。このことは、分野ごとの指

導内容の系統性のなかで充分検討されねばならず、一方において、両分野間の関連をも検討しなければならず、今後の課題である。このことに加え、生徒の反応をみても随所に指導者側の反省・再検討を要する諸点が露呈しており、例えば、時間配分・学習の主眼点の明確化・ききとりの手法・質問事項の事前準備などがあげられる。いずれにしても野外学習の地域選定や、地理的分野における「身近な地域」と歴史的分野における郷土学習の接点を求める課題に取り組まねばならない。
(文責 原 幸宏)